

令和2年院内集談会（2020）

No		演 者	演 題	発表日
1	看護部	谷 日出子 (6 東病棟) 山崎あゆみ (5 西病棟)	看護業務調査報告（係長会）	2020.02.25
2	看護部	山本美智子 (6 西病棟)	鳥取県病院協会看護部会での講演を聞き感じたこと	2020.02.25
3	検査部	山本 敏夫	血液培養装置を導入して	2020.02.25
4	手術センター	齊藤 博昭	手術センターの立ち上げと役割	2020.02.25
5	看護部	川口 祥弘 (5 西病棟) 近藤 照代 (5 西病棟)	医療施設見学報告 ～腎移植についての岡山医療センターからの学び～	2020.02.25
6	臨床工学技術課	萩原 隆之	令和元年度呼吸サポートチーム活動報告	2020.06.18
7	歯科口腔外科	稲村 昌伸	習慣性顎関節脱臼に対し関節結節削除術を行った15例の臨床的検討	2020.06.18
8	救急処置室	安田 益恵	救急室看護師の勤務体制変更の概要	2020.06.18
9	循環器内科	野口 法保	冠動脈疾患患者における手術時の抗血栓療法	2020.06.18
10	薬剤部	米田 栄子	神戸赤十字病院見学研修成果報告	2020.09.29
11	看護部	澤 真由美	せん妄ハイリスク患者ケア加算取得後のせん妄患者の調査報告	2020.09.29
12	脳神経外科	稲垣 裕敬	当院における脳腫瘍の外科治療	2020.09.29

1. 看護業務調査報告（係長会）

6 東病棟 谷 日出子

5 西病棟 山崎あゆみ

係長会で、日勤の看護業務の実態を調査し業務改善に取り組んだ。

係長自身による自己評価と、スタッフ1名の動きを係長が観察する他者評価をした。

調査結果は、一日の業務時間の中でモニタリングが約1/4占めており、次は記録であった。日常生活援助ケアは記録や診療補助業務とほぼ同じ割合だった。

各部署で自部署の問題点と具体策をあげ、係長会で各部署の実施状況などを共有・意見交換をした。

現在の取り組みと課題として、記録については電子カルテからの情報収集の方法の確認、ケア項目の観察項目の活用を促して、重複記録しないよう伝えている。部屋回りの時にはパソコンをもってまわり、その都度入力するよう働きかけをしている。

課題は、記録の簡素化に向けて現在行っている対策の継続と、よりの確な記録ができるよう指導が必要であり、各部署が同じレベルで記録できるように記録委員と協力していくことが重要である。

薬剤整理では、受け持ち患者の薬はその担当看護師が整理をするのだが、業務が終了した看護師や外来が終了した看護師が手伝って薬剤整理をしている。

薬剤業務に限らず、外来看護師との協力体制を継続させていくことが重要と考える。

他職種と協働していける対策を今後も検討していきたい。

業務改善計画を継続実施し、看護の質を高めるための業務の効率化であるよう、努力していきたい。

2. 鳥取県病院協会看護部会での講演を聞き感じたこと

6 西病棟 山本美智子

今回鳥取県南部町でのまちづくりや認知症のひとへの医療の提供についての講演を聞いた。地域での取り組みを紹介しながら、認知症ケアについて述べたい。

鳥取県の認知症高齢者日常生活自立度（以下自立度）がⅡ以上の高齢者は2018年推計21,520人、2025年には24,000人となる。認知機能低下を有する高齢者が増加していく中で、見守りカード、GPS端末機の購入助成などのあんしん見守り助成事業、認知症カフェや認知症家族つどいなど地域で認知症者や家族を支える仕組みが活用されていた。

当院では2018年の入院患者の23%が自立度Ⅱ以上となっている。認知症者は、中核症状により、混乱や喪失

を体験している。それに加え、痛みや身体の不調などのストレスを抱え入院生活をおくることになる。今まで出来ていたことが、身体の不調や環境の変化などでできなくなることもある。講演で認知症者への医療に必要なことは「今あるちからに光をあて、なおすのではなく暮らしやすくすること」と言われていた。認知症者に対し、現存能力をアセスメントし、能力を引きだし、そのひとりらしい生活を送ることができるよう支援していくことが地域、病院を問わず必要である。今までの生活や、地域のサービスや支援体制などの環境を知り、活用し連携していく事が重要である。

3. 血液培養装置を導入して

検査部 山本 敏夫

2018年10月に血液培養装置をOXOID社のSINGL™からベクトン・デッキンソン社のBDバクテック™FX40に変更した。変更の際に複数セット率の向上、汚染率の低下を目的に、採取方法及び手順、検査依頼方法の見直しを行った。導入前後1年間を複数セット率、汚染率、陽性率、陽性判定までの所要期間、分離菌種の変化を比較した。

血液培養依頼件数は毎年2～3割の伸びで、2018年は1,632件、2019年は2,129件と大幅に増加している。複数セット率は77.8%が89.9%と10%以上向上した。汚染率は4.1%が2.4%と低下した。陽性率は20.4%が23.2%と向上した。陽性に転化するまでの所要日数は平均で2.37日が1.30日と約1日短縮し、特に緑膿菌等のブドウ糖非発酵グラム陰性桿菌の所要日数は大幅に短縮した。分離菌種については、導入前において最多の分離菌種はコアグラゼ陰性ブドウ球菌属（CNS）であったが、汚染率の低下により、CNSの検出割合が低下して大腸菌が最多となった。また酵母様真菌の分離数が増えた。

4. 手術センターの立ち上げと役割

手術センター 齊藤 博昭

当院が重視する経営の3本柱の一つが「手術受入の強化」であり、それを推し進める目的で2020年1月1日から手術センターが新設された。当院の手術オーダーや手術材料の取扱いは長い間、同じ方法で行われており、非効率的なところがとても多いのが現状である。今後は手術枠を効率よく運用できるシステムづくりと、手術材料の見直しによるコスト削減を行っていく予定である。実際には手術枠の運用に関しては、次期電子カルテ導入時に手術オーダーリングシステムを導入することにより、

より効率的に多くの手術が行えるように手術枠の予約方法を改善していく予定である。また用度課と協力して手術材料のコスト削減を行っていきたいと考えている。手術をより多く行うことは当院の経営状況の改善に必要な不可欠であり、新設された手術センターを中心として職員の方々と共に、今後、様々な課題に取り組んでいきたいと考えている。

5. 医療施設見学報告～腎移植についての岡山医療センターからの学び～

5西病棟 川口 祥弘 近藤 照代

末期腎不全に対する腎代替療法として血液透析、腹膜透析、腎移植の選択肢がある。現在わが国では約33万人が透析療法を受けており、腎移植は年間約1,600例実施されている。腎移植には生体腎移植、献腎移植の2種類があり、献腎移植登録待機者は約13,000人いるが、献腎移植は少なく生体腎移植が大部分を占めている。また腎移植後の5年生着率は生体腎移植で約92%を超え、献腎移植では約80%という状況である。2017年度鳥取県においては9例の生体腎移植が行われた。

岡山医療センター見学では移植外科医師、移植コーディネーター看護師、岡山県臓器移植コーディネーターより詳細な説明を受けた。

資料を用いて岡山医療センターでの腎移植の状況、生体腎移植時のドナー精査入院時の検査内容、レシピエントのABO型不適合または交差試験陽性での術前減感作療法、献腎移植の流れについて説明を受け、レシピエントについてのパンフレット、ドナーへのクリニカルパス使用についても説明を受け、腎移植前後の実際の流れや行われている看護を知ることができた。

見学を通して献腎移植待機者の抱える問題や生体腎移植のドナー、レシピエントの内訳、検査内容を知ることができ、ドナーとレシピエントの関係性などを踏まえた看護が行われていることを学んだ。今後は移植についての知識をより高めこれから療法選択をする患者さん、現在透析を受けている患者さんへ正確な情報提供ができるよう生かしていきたい。

6. 令和元年度呼吸サポートチーム活動報告

臨床工学技術課 萩原 隆之

【活動目標】

- 1) メンバーラウンド参加率、RSTラウンドの質の向上
- 2) NPPV装着患者の皮膚トラブル0を目指す
- 3) 研修会の実施
- 4) RSTラウンドデータベースの知名度アップ

【活動内容と成果】

- 1) 人工呼吸器装着患者総数：97名(病棟23名, HCU 74名) 平均装着日数：挿管8.4日 NPPV 5.1日
- 2) RSTラウンド：対象患者15名 計45回
- 3) 呼吸ケアチーム加算：3名算定
- 4) NPPV装着：37名。皮膚トラブル発生率5.4%
- 5) 呼吸リハ介入率：70.1%
- 6) 研修会：10テーマ 参加者総数371名
- 7) 人工呼吸関連インシデント：1件

【まとめ】

人工呼吸器装着患者は年々減少傾向である。令和元年度より呼吸器内科医師がメンバーに加わったことで、より専門的な助言や患者に適した設定変更等を行うことができるようになった。ラウンドについては、チーム編成しメンバーの固定を行いメンバーのRST活動参加率増加を狙ったがあまり成果は得られなかった。現在は、一般病棟における人工呼吸器装着患者を主体にラウンドしているが、HCUや人工呼吸器装着患者以外などRSTラウンドの幅を広げていくことも検討したい。

7. 習慣性顎関節脱臼に対し関節結節削除術を行った15例の臨床的検討

歯科口腔外科 稲村 昌伸

【緒言】関節結節削除術は、手術侵襲が小さく、簡便で術後の合併症も少ない方法として現在まで多くの症例報告がなされている。今回われわれは、習慣性顎関節脱臼に対し関節結節削除術を行った15例について臨床的検討を行ったので報告する。【対象】2014年から2019年までに当科を受診した顎関節脱臼患者のうち、保存療法では再脱臼を繰り返し、自己整復が不可能な患者15例（陳旧性脱臼1例含む）を対象とした。【結果】男性10例、女性5例、平均年齢は81.9歳、13例が要介護度3以上であった。全例に関節結節削除術を施行し、関節円板切除術を10例に併施した。予後は術後再脱臼が手術症例のうち2例に発症した。内1例は術後2年で再発し、関節結節削除量の不足が原因と考え、再手術を要した。2例目は陳旧性脱臼状態で関節結節削除を施行した症例であった。再手術を計画するも、術前に基礎疾患の悪化にて永眠となった。他13例に再発は認められなかった。【結論】関節結節削除術は再脱臼の可能性が低く、術式も簡便で術後の開口制限の必要性がない点で優れた治療法であると考えられた。

8. 救急室看護師の勤務体制変更の概要

救急処置室 安田 益恵

2019年度の病院BSCに示された「救急体制の強化」を受け、看護部では救急室看護師の勤務体制を見直すとともに救急看護の実践能力の向上を図ることとした。看護部内に検討プロジェクトチームを発足させ、現状課題を精査するとともに、解決に向けて山口赤十字病院へ視察（2019年10月）等の検討会を計15回実施した。勤務体制については視察先を参考とし、HCUと救急室の統合や新設部署の開設等について協議した。最終的には2020年4月より「救急処置室」として部署新設することとなった。あわせて、救急室看護師に対しては急変対応能力の向上プログラムを実施した。

現在、救急処置室は一部署として救急室・中央処置室・中央採血室・画像センター・放射線科外来で構成されている。救急室への各病棟からの応援看護師は改善前の32名から20名に限られ、どの勤務帯においても1名は救急室業務に長けた看護師が勤務することが可能となった。救急室の勤務者が限定されたことにより、情報共有が容易となり適時適切な対応ができるようになった。今後は定期的に評価を行い、業務改善を図りながら救急看護における実践能力の向上を図りたい。

9. 冠動脈疾患患者における手術時の抗血栓療法

循環器内科 野口 法保

2020年3月日本循環器学会より冠動脈疾患患者における抗血栓療法についてのJCSガイドライン フォーカスアップデート版が発表された。

今回はこのガイドラインに基づいて、出血リスクをふまえた冠動脈インターベンション後の抗血栓療法および抗血栓薬を内服している患者における、術前リスク評価（出血リスク、血栓リスク、手術に伴う出血リスク等）、術前の休薬および術後の抗血栓薬に再開について概説した。

出血リスクが高い手術かつ血栓リスクの低い症例および出血が致命的な合併症となる胸部外科、脊髄・頭蓋内手術などを除いてはアスピリンを術後にも継続することが原則となった。抗凝固薬は、出血リスクの低い手術は24時間以前、出血リスクの中等度～高度の手術では48時間以前を最終の服用時間とすることが推奨された。さらに、クレアチニン・クリアランスによる調整を要する。

院内Webに本ガイドラインを掲載した。医療スタッフ全員が理解することが必要である。

10. 神戸赤十字病院見学研修成果報告

薬剤部 米田 栄子

教育研修推進委員会の他病院見学研修として、2019年8月30日に神戸赤十字病院を訪問した。神戸赤十字病院は、全国の日赤の中で最も多くの薬剤管理指導件数を上げており、その方法を参考にすることが大きな目的であったが、それ以外の薬剤部全般の業務内容や勤務形態、実務実習を含めた教育システム等も知ることができた。当院と大きく違う点は、TPN調製件数の平均が13件/月（当院は207.3件/月）と少なく、急性期の患者が多いと思われた。

成果として、持参薬鑑別の簡素化や毎日の勤務スケジュール調整等、当院で取り組める業務改善を行い、時間外勤務を増やすことなく800件/月程度であった薬剤管理指導件数を1,000件/月に伸ばすことができた。

しかし、さらに今年度薬剤師の退職が2名予定されており、来春入職予定の新人薬剤師が独り立ちするまで、薬剤管理指導件数の減少は避けられない。薬剤部内の業務改善は既に行っており、今後は早期に発注システムの導入や調剤注射カートの導入等の検討が必要と考える。

11. せん妄ハイリスク患者ケア加算取得後のせん妄患者の調査報告

看護部 澤 真由美

2020年度診療報酬改定によりせん妄ハイリスク患者ケア加算が創設され、6月より取得を開始した。取得後3か月間のせん妄発症患者を調査した結果、入院患者1,692名のうちせん妄発症した患者は96名で発症率6%だった。これは、中医協報告の6～10%と同様で標準的である。せん妄発症した患者の特徴としてはリスク因子が複数あり、中等度以上の認知症患者、脳血管疾患と整形外科的疾患患者、80歳以上の高齢者が多い事がわかった。せん妄発症時期は入院3日までの発症が約80%と多く、認知症の無い患者でも約40%発症していることから、入院時からのせん妄予測と予防ケアの実施が定着することが必要である。また、せん妄は誰でも起こり得る症状であり、複数の因子が影響し発症する事から、患者に関わる全ての職種がそれぞれの専門性を活かしてせん妄予測や予防ケアを行うための組織作りが必要だと考える。

12. 当院における脳腫瘍の外科治療

脳神経外科 稲垣 裕敬

当院では2009年4月からこれまでに111例、126回の脳腫瘍手術を行ってきた。内訳は髄膜腫が最も多く、

次いで転移性脳腫瘍，下垂体腫瘍，神経膠腫などであった。転移性脳腫瘍の原発巣の内訳では乳癌が最も多く，その他外科，耳鼻科，泌尿器科領域の癌であった。髄膜腫と転移性脳腫瘍について代表的症例を呈示しながら腫瘍の特徴，手術適応，手術の問題点などを考察した。髄膜腫は無症状あるいはごく軽微な症状の症例が多く脳の損傷をできるだけ回避しながら全摘出することが重要である。転移性脳腫瘍は厳密な手術適応のもとに侵襲の少

ない手術を心がけることにより術後早期の脳浮腫軽減が得られ，QOLの劇的改善により有意義な時間を過ごしていただくことが可能となる。

脳腫瘍の手術症例の中で特に難易度が高く印象に残る代表的症例として脳幹部海綿状血管腫，松果体部の混合性胚細胞性腫瘍，頸静脈孔神経鞘腫，海綿静脈洞への浸潤性下垂体腺腫の症例を供覧した。